

鹿児島とアメリカ

——1837年～1863年——

接触から薩英戦争まで

門 田 明

研究の目的

国際交流基金による共同研究「日米地域交流の実態調査」に参加し、鹿児島県の調査を担当することになり、現在の鹿児島・アメリカ交流の背景ともなる、鹿・米交流の歴史を知っておきたいと考えたのが、研究ノートとでも呼ぶべきこの概説執筆の動機である。

鹿児島の国際交流の最初は遠く遣唐使の時代に遡るが、ヨーロッパとの交流も、鉄砲の伝来、フランシスコ・ザビエルの鹿児島渡来に始まり、鹿児島のベルナルドが最初の日本人としてポルトガルの土を踏むことから相互交流が出発している。江戸時代に入って幕藩体制が確立し、鎖国が行われるようになると、長崎が国際交流の唯一の窓口となるが、それでも薩摩藩は中国に朝貢する琉球を属領とすることによって間接的に貿易を行ない、国際交流において他の諸藩とはやや異なった道を歩んでいる。

安政の開国後は、長崎の薩摩藩邸をいわば通商代理部として、外国と積極的な交易を開始し、特にイギリスとは、一度は軍事衝突を行なうが、後には深い友好関係を結び、明治を迎えるのである。

ところで、アメリカとの関係はどのようなであったろうか。

石附 実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房・昭和47年）巻末の幕末・明治期留学生一覧を見ると、1860年から1867年にかけて、日本全体の留学生の約29%・35%・19%が英・米・仏の三大国にでかけている。この三国の留学生で全体の80%以上をしめている。1868年から74年の明治初期になっても、この傾向は変わらない。フランスが減り、その分英米が増え32%（英）・41%（米）・10%（仏）となっている。これを鹿児島県出身者だけで見ると、おなじ英・米・仏に、1867年までには、50%（英）・44%（米）・6%（仏）、68年～74年では、18%（英）・53%（米）・6%（仏）となっていて、総体に他地域と比べて英米とのつながり強い。そして明治以前は英国が多いが、明治以降は全国と比較しても、他の留学先に比べ、強いアメリカ志向がみられるのである。

外国に滞在する日本人留学生の数は、日本とその国との交流の疎密を示す重要な指標の一つになりうると思うが、文部省の調査によると、1991年の調査で、海外留学生約12万人中、実に約7万人がアメリカ合衆国におもむいている。¹ 第二次世界大戦後の日米関係を考えればこの圧倒的な日

本のアメリカ志向は当然のことかも知れないし、鹿児島においても恐らく同じ傾向が存在するのではないかと思われる。

しかし、上の幕末・明治の数字を見ると、このアメリカ志向はすでに明治初期に始まっているようである。そもそもの始めから鹿児島とアメリカの係わりを観察することで、時代々々によって加速あるいは減速されていった、アメリカへの傾斜を見ることが可能であろう。また現代の鹿・米関係の正確な位置付けを行なう助けになるかと考える。

鹿児島とアメリカの接触

(1) モリソン号²

この論文で「鹿児島」と呼ぶ場合、便宜的に現在の鹿児島県の行政区域を越え、(必要に応じて沖縄をも含め)旧薩摩藩の支配下にあった領域にも及ぶたい。

鹿児島が始めてアメリカと接触することになったのは、1837年米船モリソン号が山川沖に碇泊した時である。この船は、広東のアメリカ商社オリファント商会によって日本に送られたものであり、船上には、アメリカ宣教団によって保護され母国に送り返されてきた、日本人漂流民7人が乗っていた。不幸にも幕府によって1825年「異国船打払令」が公布されており、先に寄港した浦賀においても、また山川においても、来航理由の聴取もないまま、砲撃、退去させられた。

このモリソン号事件は、鎖国が如何に非人道的であるかという見地から、国際的に大きな反響を呼び起こし、アメリカが軍艦を派遣して強圧的に開港を迫るきっかけとなり、またその国際世論の状況はオランダ商館を通じて幕府の耳にも届けられ、幕府を動揺させることとなった。国内的にも洋学者の間に幕府の外交政策批判を生み、幕府は高野長英など関係者を弾圧したものの、その後打払令を緩和し対外政策の転換を計ることとなった。

(2) 中浜万次郎³

こうして、第一回目の鹿児島・アメリカの接触は不毛なものとなったが、第二回目は、はるかに実質的なものになる。1851年アメリカ船サラー・ボイド号によって琉球海岸に送られた中浜万次郎ら三人の漂流民が、ボートで上陸する。旧暦正月のことである。

彼らは薩摩藩の琉球在番奉行所の取り調べを受けたのち、旧暦7月鹿児島に送られ、旧9月に長崎で訊問を受け、旧10月生国土佐に帰っている。

この鹿児島滞在中、藩主島津斉彬が万次郎らから、直接アメリカ事情を聴取している。戸川残花『中浜万次郎伝』によると「…酒肴を賜いて後、人を払ひて米国の政体人情地理を問はせられ、万次郎は少も臆せず(民主主義の教育を受けたれば)日本大名の魯鈍なることを弁論し、彼の国は人才によりて自然に尊卑のあることを陳述せりとぞ」とある。

また、市来四郎の『史談会速記録』によると「…航海捕鯨の仕方、鯨漁船製造の事にも及び、雛形も造らせました。其時斉彬は永く鹿児島に止まる様に話を致させましたけれども、どうしても一度は故郷に帰りたいと云って、止まる意はなかったそうです」と、帰国の意志が変らなかった。

洋学に興味を持ち、研究ばかりでなく殖産にもそれを応用した斉彬のことであるから、万次郎から得たアメリカについての知識は、その後の薩摩の進路に有形無形の影響を与えたであろう。上述の「雛形」について、市来四郎は次ぎのように続けている。

「其雛形に因りて数艘造らせました。名けて越通船（おっとうせん）と唱へ、鹿児島湾内の運送船に用ひさせました。…これも運輸には余程便利で、近頃迄それに模造して商人共か自造して数隻ありました。為めに多少益か有りました」といっている。

斉彬は、知識をたちまち実益に結び付けている。

（3）米使ペリー¹

アメリカ合衆国は、東部13州と英国から割譲されたミシシッピ河以東の土地を領土として、1783年独立したが、その後次第に西部に発展し、1846年にはワシントン・オレゴンを併合して太平洋に達し、1848年にはメキシコ戦争の結果カリフォルニアを得て、大西洋から太平洋にいたる広大な地域を領有することになった。

その頃すでに北西太平洋にはアメリカの捕鯨船が進出し、捕鯨事業はアメリカの重要な産業となっていた。この捕鯨船団のため緊急時の避難所が必要であった。また、太平洋に達したアメリカにとって、対岸のアジア大陸との間に安全な海路の必要性が大きくなった。1844年望厦条約によって中国との通商が始まった。鉱山の開発や鉄道建設に従事するため、多数の中国人労働者がアメリカ西海岸に送られ、アメリカ太平洋航路はアメリカ発展のために、死活の意味を持つことになり、日本の開港が強く求められていた。

一方、漂流民を母国に送り返すため派遣された無防備のモリソン号を、砲撃退去させた日本の行為は、国際的な非難を招いたから、軍艦を派遣し強圧的に日本を開国させることが考えられた。アメリカ政府はこの計画を事前に公式にオランダ政府に通告し、協力を求めている。通告を受けたオランダ政府も、この情報を内々幕府に知らせている。以上がペリー派遣の背景である。

東インド艦隊司令長官ペリー（Perry, Matthew Calbraith）が那覇に来航したのは、1853年5月26日のことである。当時琉球は南海の小王国であり、中国に朝貢していた。政治上重要な問題は、中国の指示を仰ぐ立て前であった。同時に薩摩の事実上の属領であったことは周知のとおりである。

ペリーが、日本に行くに先だって那覇に立ち寄ったのは、ひとつには、ここで日本派遣の艦隊を集結させるためであった。また、ひとつには、独立国として立場の曖昧な琉球をまず開港させ、アメリカ太平洋航路の補給地とする考えであったと思われる。したがって、来航するとただちに琉球政府高官に面会を求め、一カ月余りの碇泊と物品の購入許可を要求し、探検隊を組織して島内の調査を行なっている。

これに対して琉球政府の立場は、正式に国交は行なわない、通商は行なわないという、従来の立場を可能な限り守ろうとしている。艦隊から要求された物品にしても、贈与という立て前を崩さず、対価を受け取って通商の実績を残さないよう努めるが、アメリカ側は執拗に支払いを主張し、ついに代金を受け取らせている。

米艦来航の計画は、早く斉彬の耳にはいっていた。このころ斉彬の外交についての考えは、紛争を極力避け、交渉に時間をかけ、その間に防備を固める、というものであり、幕府にもそのように助言している。特に海軍力の充実が急務であることを進言している。しかし、いずれ開港は時間の問題と考えていたようである。やがて、琉球については、万事臨機に対処する許可を幕府からもらい受ける。また、軍備増強を幕府に進言しながら、琉球や薩摩領についてはそれほど顕著な防備充実を行なわない。この際の斉彬の行動を見ると、先に中浜万次郎を接見して得たアメリカの知識の影響によるものか、武力対決よりも開港を予見して行動しているようなふしがある。

こうしてペリーは4隻の艦隊で、7月2日那覇を出航し江戸湾にむかった。滞在中のペリーの態度は終始強圧的で、万事阻止しても無益であることを教えようとするかのごとくであった。

日本政府に開国要求を行なったペリーは、回答期限を翌年春として、7月25日ふたたび那覇にもどった。彼は琉球政府にたいして、家屋の賃貸し、貯炭所の設置、島内の自由往来、交易の自由などの権利を認めるよう要求し、曲折はあったが、結局要求の全部を承諾させた。

その後アメリカ艦船の出入は頻繁で、琉球は事実上アメリカ海軍基地の様相を呈している。こうしてペリーは、1854年2月7日再度江戸湾に向かって出航したが、その折り若干の兵員を残し、琉球がアメリカの保護下にあることを他国の来航船に周知せしめるべく文書を預けている。英仏露の艦船の琉球来航は頻繁であり、特に、当時次第に頻繁の度を加えていたロシア艦艇の南下に警戒的であったためであろう。また、ペリーには、薩摩の圧政から琉球を解放し、アメリカの保護下に置くのが琉球の幸福であるとの考えもあったようである。

ペリーの艦隊7隻は2月13日江戸湾に集結し、3月31日、日米和親条約が締結された。1854年7月1日ペリーは再び那覇に戻ってきた。この時ペリーは、琉球政府との間に条約を締結する意図を持っていたが、それに先立ち、アメリカ水兵の変死事件があり、この解決を強硬に申し入れた。この事件は、酒に酔った水兵たちが住民に略奪・暴行を行ない、住民の抵抗にあい、水兵の一人が水に落ちて溺死したものである。結局犯罪をおこなった水兵は軍法によって処罰され、住民も琉球の法規に照らして処分されることで解決した。

条約締結については、琉球政府は拒絶すべく努力を尽くしたが、アメリカの態度は更に強硬で、ついに7月11日修好条約が締結された。この時、条約中に琉球を独立国とみなす文言があったのを、琉球政府は清国との関係を憂慮し、草案から削除せしめている。

琉米条約締結のしらせを受けると、島津斉彬は、かねて予想していたものと見え、やむをえない措置として認めたが、条文中自由貿易を可能とする個所については、日米条約のように公館において行なう管理貿易とするよう指示している。また、キリスト教の布教を警戒し市民と外国人との自由な接触を阻止するよう取り締まりの強化を命じている。

条約締結後、薩摩・琉球方面でのアメリカ船、軍艦の来航、測量など、従来以上に頻繁であるが、そのことによって問題が起こることはなかった。

生麦事件

ペリーの琉球来航の次ぎに、アメリカがやや間接的ながら、薩摩の惹き起こした事件に係わるようになったのは、いわゆる生麦事件の時であった。

周知のようにこの事件は、1862年9月14日、武蔵の国生麦村で起こった薩摩藩士によるイギリス市民殺傷事件である。島津久光の行列に踏み込んだとして、4人のイギリス人が護衛の武士たちに襲撃され、一人が死に、二人が手傷を負い、女性一人だけが無傷で難を逃れた。傷を受けた二人はクラークとマーシャルというイギリス商人で、神奈川本覚寺のアメリカ領事館に保護を求めて逃げ込んだ。

このように、直接の被害国はイギリスであるが、攘夷浪人のテロ行為は、居留地の西洋人全体の恐怖の的であった。また浪士ではない大藩の藩士が引き起こしたこの事件は、藩政府の組織的武力を背景に白昼公然と行なわれた印象を人々に与えたから、イギリス以外の外国代表たちも事件の行方については深い関心があった。

生麦事件とこれに続くいわゆる薩英戦争については、多くの資料があるが、この論文ではニューヨーク・タイムズ紙の論説によって、アメリカ人の一般的な反応を見たい。

ニューヨーク・タイムズの記事（1862年12月14日）⁵

「数週間前、日本人によってイギリス公使館員にたいし、またも行なわれた攻撃について話した。これは本年に入り二度目のものであり、外人警備員二人が死亡することになった。今回更に重ねて、日本における卑劣な攻撃について書くことは、義務とはいえ心痛むことである。この危難に遭遇した英人一行の一人は、文字どおり滅多斬りにされ、二人が重傷を負った。彼らは東海道を午後の乗馬を楽しんでいた。東海道とはミヤコからエドにいたる大道である。帝国最大の公道であり、道巾も広く、常によく補修されているので、この地に住む紳士・淑女が二三マイル馬を駆けさせる、結構の遊樂地である。天子（Spiritual Emperor）の住むミヤコや、帝国の南部・東部からエドに向かう旅人は、すべてこの道を通るので、ほとんどいつも混雑している。この国の習慣として、藩主は一定期間ごとに中央政庁におもむくのであるが、彼らの多くは、時には数百人におよぶ家来の大行列を従え、この道を行く。

通常政府は、大藩の藩主が通過する際は、ここに駐在する諸条約締結国の領事にたいし、自国々民が行列中の従者と衝突を引き起こさぬため、彼らに東海道の使用を避けるよう通告を出すことを要請し、この通告はしきたりとして尊重されており、その日は道路は日本人専用となる。先週日曜日にも同様の通告がなされ、帝国最強の藩主薩摩侯が、天子・ミカドから平民皇帝タイクンへ派遣された勅使とともに自国への帰途につき、二日間にわたり東海道を使用するとのことであった。当地奉行の怠慢から、通告は当日の午後になるまで、われわれのもとには届かなかった。いつもの日曜と同じように、数組の人々が、午前中、東海道で乗馬を楽しむため出掛けている。神奈川近郊で何マイルも続いている行列に出会うまでは、この行列の通過することを彼らは何も知らないという

結果になった。紳士三人・淑女一人の一行は、危害を加えられるなど夢にも思わず、行列の進行方向と逆の方向に進み、二三マイルは何も起こらなかったのであるが、やがて行列の中心部と思われる数百人の武士にぶつかった。道路は二三百人の武士で完全に遮蔽されていた。彼らは高位の人物の護衛兵のようであった。そしてその前を道の両側に沿って、およそ50人、一列縦隊の兵士が進んでいた。

一行がこの前衛の兵士に近付いたとき、彼らは引き返すように手まねで合図された。その間にも本隊は前進を続け、一行が反対方向に向き変えようとしたその時、一人の屈強な武士が隊伍から歩みでると、肩衣をはねのけ上半身裸になり刀を抜き、一番近くにいた紳士に、両手で狙い済ました恐ろしい一撃を送った。これが肩先を切り裂いた。前衛の兵士も今や一行を押し包み、てんでに刀を抜くと、狂暴な必殺の攻撃を始めた。他に逃れるすべがないと見てとり、一行はそろって十余の抜刀の兵の真正面に突入し、文字通り彼らをひづめで踏みにじった。婦人さえ、頭部を狙う一撃を受けたが、間一髪身をかがめ、太刀風を残し刀は頭上をかすめ、彼女の乗馬帽を真っ二つにし、地上に落としたのである。馬上の人物を狙った刀で傷付いた馬は、狂乱状態になり凄じい勢いで疾走し、暴徒を振り切って逃げた。その婦人一人が無傷で逃れたのである。他の者より重傷を負った一人は、馬上で身を支えきれず、ほんのしばらくの後、馬から落ちた。これを見て、紳士の一人は、哀れな友の力になれるのか確かめようと、瞬時馬を止め、その間もう一人は、婦人とともに馬を走らせた。落馬した友人が死んでいるのは一目見ればわかった。馬をとめた紳士も、もうひとりの友人に合流しようと、また馬を走らせた。

一行が外国人の住居にたどりつくには、同じ東海道をまだ二マイル走らなければならなかった。ひどく出血していたが、紳士たちは馬を急がせながら、ただ、どこかに無事たどりつくまで馬から落ちないようにと祈るばかりであった。同じ行列の供侍い数百人の横を走り抜けていったが、新たに暴力を加えられることはなかった。しかし、命懸けで逃げる哀れな被害者にとっては、これ以上襲撃されないなど一瞬も考えられなかった。一行は、この東海道の横浜対岸、陸路三マイルのところにあるアメリカ領事館に行き着ければと考えた。怪我をして、出血でひどく弱っていたので、そこにたどり着く前に馬に乗っていることがもう出来なくなり、たまたま出会った親切な日本人に支えてもらった。かれらが馬から降ろされると、ほんの二三分と間をおかず、ヘボン博士 (Dr. Hepburn) が付き添い、傷の手当てをした。怪我はひどかったが、致命的なものではなかった。

女性のほうは、気が動転していたためであろう、考えられないような勘違いをして、領事館には行かず、ひとり横浜方向に走った。まだ、まわりには何百という兵士がおり、その瞬間にも斬り殺されるものと思っていた。道路が海岸沿いになる場所にさしかかると、暗殺者たちに追跡されると誤解して、逃れたい一心から海に馬を乗り入れようとした。殺人者の手にかかるよりはましだ、と思ったからである。しかし、深みに進むことを馬が嫌った。おかげで彼女は命拾いしたのである。道路に戻り、また逃げた。友人の返り血にまみれ、風に髪の毛をなびかせ、何マイルも、焼け付く太陽の下を逃げた。二度、馬もろとも倒れた。しかし優れた乗り手であったから、もう一度鞍にまたがり、先を急がせた。馬が精根尽きて倒れ、彼女自身気を失うまで手綱を引くことはなか

った。その時横浜の町に入る最初の家の前にたどり着いていたのであった。彼女は、そこから自宅まで運ばれた。何時間も、彼女は危篤状態で横たわっていた。確かに暗殺者の剣は逃れたが、脳炎か慢性的精神錯乱症の差し迫った危険があった。しばらくの間、あの恐ろしい事件についての情報といえば、彼女のもたらしたものだけだった。が、すぐに、イギリス、フランス両公使の護衛騎兵が、残されたままになった死体を捜すため、東海道に出て行った。見付かった時、死体にはコモがかぶせてあった。これ以上は考えられないほど、物凄い、むかつくようなやり方で、ずたずたに斬られていた。命がなくなってから、何度も斬られていた。

町の人々の興奮は大変なものだった。ただちに、会議が召集され、軍艦の将官にたいし、悪漢を拘禁するため何らかの手段を取るよう、強い要請がなされた。しかし、何も実行されなかった。折しも、この何月かの間では最大の、英・仏・蘭の艦隊がこの港に投錨中で、1,500名程度なら、兵員を上陸させるのは簡単なことだったろう。また、暗殺者どもはほんの数マイル下った村落で夜営中であつたから、かれらを拘禁することもできたであろう。この問題で英国政府がどういう行動にでるか、これからも見守らねばならない。イギリス人が、日本人と衝突することになったのは、極めて不幸なことである。と同時に、イギリス人こそ、このような度重なる暴力行為にたいして、日本政府に罰を下す、最適任者と思われる。かれらが自らふさわしいと考えればの話だが。

私見を述べれば、そういうことは何も行なわれまいだろう。おかしいことだが、この暗殺者というのは、当地のイギリス商社を通じ素晴らしい汽船を購入し、ほんの二三日前にその引き渡しを受けた藩主の従者である。報道によれば、この藩主は自分の藩士たちの軽率さに頭を悩ましているのである。もっとも、これが本当か嘘かなかなかわかりにくいことだが。しかし、私は彼が外国人にたいして友好的だと信じている。その理由は、ほんの二三日前、彼の家臣の複数の人物が私にむかって、この藩主は、今のように政府を通じてやるのではなく、自分の領内の港のどれかで直接われわれと貿易することを望んでいると、公言したからである。

すべてが再び静穏になり、この事件は貿易に何の支障も与えていない。東海道を乗馬に興じるのは何時の場合も危険であつた。将来も数年はそうであろう。この帝国の遠隔地出身の日本人がわれわれのことを良く知り、またわれわれが彼らのことを良く知るまではそうだろう。そこで、始めはもっと多くの人命が失われるという代価を払うかも知れないが、この国の開国が早ければ早いほど、進歩と商業に一層好ましいのである。」

リチャードソンの検死を行なったのは、後に鹿児島で医療と医学指導にあたったイギリス人医師ウィリアム・ウィリスであつたが、彼が領事裁判所で行なった証言は次のとおりである。

「昨夕午後5時頃、神奈川のむこう、つまり江戸寄り約4マイルの路傍で、私はこの死者が倒れて死んでいるのを見ました。診断してみますと、数ヶ所非常に大きな傷（several very extensive wounds）があり、そのどれもが致命的なものでした。今ここに横たわっている死体が、私が神奈川の江戸寄り約4マイルの道路際で見たものと同一であると断言します。この死者の死因となった複数の傷は、明らかに鋭い刃物でつくられたものです。ただ腹部の二つは違っていて、槍のような

武器によるように思われます。…」⁶

このウィリスの証言からみると、上のニューヨーク・タイムズの記事は、やや誇張的な印象を受ける。

一方、貿易の有力な顧客を失いたくないので、イギリスがあまり事を荒立てないだろう、というような予測をしているのは興味がある。このニューヨーク・タイムズの記者の想像の真偽はともかく、事実、イギリス代理公使ニールは、ただちに兵を送って島津久光を捕縛すべしという強行論を押さえて、ひとまず外交ルートを通じて解決をはかる、最も穏便な方法をとっている。

アメリカは、まだ独立戦争など、イギリスとの過去の対立が完全には払拭されていない時代である。イギリスに対する論調は多少辛辣である。例えば、アメリカ領事館員であったヴァン・リードなど、危難に会ったイギリス人を「日本の習慣も知らず軽率なことをして、自業自得だ」というように批判している。⁷ 彼は同じ島津の行列に行き合うが、馬を降り路傍に寄って行列の通過を待ち、何の問題も起こらない。

相互理解の必要を説くニューヨーク・タイムズの結論は、現代のわれわれにも通用する、極めて理性的なものであるが、複数の薩摩藩士から、薩摩は幕府の貿易独占に反対するだけで、各藩にもその機会を与えるなら開港に賛成だ、という趣旨の発言を聞いているのは興味深い。これは薩摩開明派の持論であり、後にイギリスに派遣された寺島宗則がイギリス外相に伝えた、薩摩藩の意向である。恐らくこのニューヨーク・タイムズの記者は横浜滞在中の寺島あたりから耳にしたのであろう。

さて、いまひとつ、アメリカ領事館で怪我人の手当てをした、アメリカ人医師ヘボンのこの事件に対する反応を見よう。

ヘボンは1862年1月13日アメリカのミッション本部に送った手紙の中で、大名行列について次のように書いている。⁸

「大名の一人が国表から江戸へ参観交代する途中、神奈川を通過するとき家々は戸を鎖し、誰も街道に出歩くことが許されないのです。そしてわれわれ外国人がこれらの行列に出遇うことを非常に恐れていますので、役人がわれわれのところへ来て、街道に出て行かないように懇願しました。当地の領事などもこうした場合、各国人に街道を避けるよう通告しました。日本人が合衆国で待遇されているのとくらべて天地の差です。この点が外国人と交際する方法において大きな難関の一つになります。外国人は大名が通るとき武士と同じく下馬しないで街道を通るのが普通です。しかしわたしどもは一々下馬するので彼らはわたしどもにあうとこの点で恐縮しているようです。」用心深い外国人はいつも下馬していたようである。

生麦事件については10月4日付で「薩摩藩主自身の命令で一イギリス紳士を殺害したあの最も野蛮な、原因不明の殺傷事件は今までの事件に比べて、とてもごまかすことがむずかしい事件なのです。わたしの感じでは、問題は急速に危機に直面しており、また何らかの外国の干渉が加わるように感ぜられます」として、事件の深刻な発展を予想している。

5月5日付の手紙は「商人も、苦力も、船頭も、召使いもみな襲いかかる危険から逃れるため、わたしどもの居留地から田舎の方に退却しつつあります」と横浜の実情に触れ、大争乱になることを危惧している。さらに「イギリス政府は若きリチャードソンの殺害を中心とするこの刃傷と侮辱に対し、十分な賠償を要求する決意を示しました。その目的で軍隊の他に大艦隊が集結しております」として戦争を予想している。

5月11日にはアメリカの軍艦ワイオミングが入港し、ヘボンも予想される戦乱を避け横浜を退去することを考えているが、やがて幕府がイギリスの要求に応じることとなり、横浜はもとの平和を取り戻している。

薩英戦争について、ニューヨーク・タイムズは若干の論評を添えて事実を伝えている。論評の内容は、予想以上のイギリス側の損害を取り上げ、戦火が広がった場合さらに大きな損失が出るかも知れぬ、というような想像であるが、薩摩の汽船が拿捕されたとき英艦の捕虜となった寺島宗則・五代友厚について次のように書いている。

「日本の提督と拿捕された汽船の船長の一人は旗艦にとどまっている。彼らは日本を離れたいとの希望を表明したと言われている」

艦上での彼らの言動についてはいろいろに伝えられているが、名乗り出て自訴した場合、死罪は免れまいというのが最大の心配で、そこから、さまざまな方法が考えられたのである。そういう中で、国外亡命もまた解決法の一つとして検討されたかも知れない。

とにかく、この二人の開明派が生き残ったことが、その後の薩摩の進路に一ひいては将来の薩米関係に一大きな重要性を持つことになった。

寺島・五代の英艦脱出

寺島・五代の英艦脱出については、アメリカ公使館員ヴァン・リードが大きな役割を果たしている。イギリス旗艦の提督キューパーが、彼らを釈放しても幕府に捕縛されるのではないかと懸念したのにたいして、ヴァン・リードが身柄の安全を保証し、手引きして逃亡潜伏させる。

脱出の様子はハーバード大学ベイカー・ライブラリー所蔵のヴァン・リード書簡手写抄本に次のように書かれている。英文を翻刻して示してみよう。⁹

Upon the arrival of the admiral with his prisoners, 2, one a Com^r & the other his aid, whom I well know & had been intimate for four years, one of whom had been to England with the Embassy. I went on board the first, managed to work round, saw the Japanese, & actually got the Admiral interested to such an extent that he decided to allow them to depart — but he would not be accountable for their safety knowing that Tycoon's officers would cut their heads off if taken. I took charge of the men & guaranteed their safety. The night after their arrival, dark stormy, & blowing a great gale. I procured the "Lotus" boat with 10 men, a strong boat having taken the precaution to procure a change of clothing for

the prisoners, as a “traveling merchant” (Japanese) and that night rowed until 1 o’ck being 5 hours & towards Yedo landing them safely on their soil.

I have regulated the rumors in the papers here, to throw the Japanese Gov’t of their guard as to the way they have gone : Great care has been taken to stop all travellers by the Govt intending to capture them. Their swords, clothing & valuables are in my possession. I enclosed chit received from one of them showing their safety —characteristic of the people—brave to the last.

概して、生麦事件・薩英戦争に対するアメリカの反応は、当事国でないこともあってか、傍観者のである。ヘボンも、11月27日付で薩摩がイギリスに賠償金を支払って事件が落ち着いたことを報じるだけである。しかしこの事件を契機として、やがてアメリカも鹿児島と密接なかかわりを持つことになる。このことについては、稿を新たにしたい。

注

- 1 『我が国の留学生制度の概要—受入れ及び派遣』（文部省学術国際局学生課・平成4）
- 2 『鹿児島県史』第二巻第四編第九章参照
- 3 『中浜万次郎集成』（小学館・1990年）参照
- 4 「鹿児島県史」第三巻第二編参照
- 5 「Affairs in Japan—The New York Times より」（鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』第4号・1975）
- 6 “Irish University Press Area Studies Series, British Parliamentary Papers ; Japan ; Report and Correspondence Respecting Japan 1864 ~ 70”（Irish University Press）
- 7 『薩藩海軍史』中巻 304頁
- 8 『ヘボン書簡集』高谷道男編訳（岩波書店・1959年）
- 9 Extract from a letter from Mr. Van Reed to Mr. Heard, Kanagawa 20 Sept 1863 (in the custody of Baker Library, Harvard Business School)

(1992年9月11日受理)